

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2012年8月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：言語教育としての「自分の日本語」その意義と可能性
－「日本語人生」という物語の意味－

申請者氏名：鄭 京姫

主査 池上摩希子 (大学院日本語教育研究科教授)
副査 川上 郁雄 (大学院日本語教育研究科教授)
副査 小宮千鶴子 (大学院日本語教育研究科教授)

1. 研究の主題

本論文は、日本語教育学研究において重要な課題である、「日本語」とは何かについて問い、「自分の日本語」「日本語人生」という概念を立てて論じたものである。日本語教育において、これまで学習者は、初級学習者、韓国人学習者、年少者など、何らかの観点によりカテゴライズされて論じられることが多かった。本論文においては、学習者は「個」の視点から日本語を学ぶ一人ひとりとして捉えられている。そして、インタビューによって一人ひとりの語りは丹念に聴かれ、結果、一人ひとりの「物語」が「日本語人生」という「物語」として描き出されていく。申請者は、「自分の日本語」の意味を一人ひとりの生身の人生から考えるという課題を設定し、それを「日本語人生」という独自の概念を駆使して探求しようとした。また、本論文では、聴き手であり書き手である申請者自身も「日本語人生」という「物語」を語ることによって、学習者一人ひとりの「日本語人生」に意味づけを行うことを可能にした。その結果、申請者の葛藤と変容も織り込まれた、分厚いライフヒストリー研究となっている。

2. 研究方法

本研究では、40名の日本語学習者に対してインタビューを行い、その中で継続的にインタビューが実施でき、かつ質的に豊かな物語を語った14名が語り手として選定されている。非構造化インタビューとナラティブ・インタビューのふたつの方法が援用され、インタビューを文字化したトランスクリプトの他にも、フィールドノーツの記録を分析対象とし、エスノグラフィーとして丁寧な記述が試みられている。

分析の枠組みは「ナラティブ分析」であり、時間的順位に即した出来事の抽出から、出来事間に因果関係が見られる語りの抽出、コーディングに至り、最終的には次の3つの観点による分析が行われた。

- ①「誰に向かって語っているか」
- ②「なぜ語るのか」
- ③「私が共感し思いを巡らせるものとは何か」

学習者が誰に向かって何を語るのか、そしてなぜ語るのか、さらに実践者であり研究者である申請者がその語りに「共感し思いを巡らせるもの」とは何かを研究視角とし、語られた「物語」を分析している点は、これまでの研究にはないオリジナリティが認められる。

3. 内容と考察

14名の語りは上記の3つの観点による分析を経て以下の4つの物語に分けられており、これらを節として第3章が構成されている。

- (1) 「くわたしたち」、その差異の物語」
- (2) 「わたしの日本語、その変化の物語」
- (3) 「「母語」「母国語」「外国語」を巡る物語」
- (4) 「わたしを生きる「ことば」の物語」

ここでは、一人ひとりが自分の「日本語人生」を語りながら、自分にとっての「日本語」の意味を語っていることが読み取れる。この第3章での語りは、続く第4章と第5章での考察を導くものとなる。

第4章においては、「自分の日本語」とはいかなるものかについて、考察がなされている。本来、一人ひとりの日本語であるものが二分化され、序列化される問題を指摘した上で、それを乗り越えることは「自分の日本語」によって可能になることを示唆する。固定的な自己を越えて世界とつながることによって、固定観念を乗り越えることが可能になる、それは即ち「自分のことば」を持つことであり、「ことばの教育」がなすべきことである、とする。

第5章においては、この「自分のことば」を育むことが日本語教育の文脈ではどのような意味を持つか、日本語教育と「日本語人生」を結ぶ必要性を述べ、そのために「日本語教育」を再定義することから論を展開する。最終的には「自分の日本語」を育む「自分の日本語教育学」の構想を示し、意義と可能性、展望を述べる。

本研究の主な主張は以下の3点である。日本語学習者から見た「日本人の日本語」という唯一で固定的な日本語像によって、日本語学習者の見方やアイデンティティが制限されてきている点、しかし、その中でも学習者は「自分だけの日本語」「自分にとって意味のあることば」で生きようとしており、それは「自分らしさ」の探求過程でもあるとの主張が2点目である。また、「言語」間、「わたし」と「他者」の間、居場所から見える自分と他者の関係、そして学習者が自分の「物語」とアイデンティティを語ることによって解き放たれ、そのことによってエンパワーメントできるという点もまた、非常に示唆に富む知見と言えよう。

4. 評価と課題

ここまで述べてきたように、本研究は日本語教育と「日本語人生」を結ぶことの意味、言語教育としての「自分の日本語」の意義と可能性を探求するために、日本語学習者の「物語」をインタビューによって紡ぎ出し、描いたものである。この点は、日本語教育学研究において新しい問題領域を創出したものであり、日本語教育学の新たな領域を切り拓く独創的かつ意欲的な研究として高く評価できる。同時に、14名の「日本語人生」そのものは、日本語学習者が、日本語をどのように捉え、どのように学んでいるのかを知るうえで、貴重な資料となり得ると考える。その意味では、日本語教育関係者のみならず、より広い層の読者を得てほしいと思わせる論文となっている。

また、このような「日本語人生」のあり様をもとに日本語教育のあり方を問い、日本語教育における「自分の日本語」の意義と可能性を主張した点は、日本語教育学への問題提起となる。さらに、申請者がこの研究成果を「自分の日本語教育学」として果敢にまとめあげようとした点も、評価できよう。

なお、今後の課題として次の諸点があげられる。日本語は日本人のものではなく学習者一人ひとりの「自分の日本語」であるとし、この思想への転換と日本語教師を意識化することによって、差別構造などを生む固定観念を乗り越えることが可能になると述べている。この思想の転換は学習者にどのようにもたらされるものか、より明確な考察がほしいところである。また、学習者のアイデンティティを捉えるものとして「能力」「自己評価」をあげているが、その場合の「能力」は従来の日本語教育で言われている「能力」とどう違うのか、また、実践者は「自己評価」をどう捉えたらよいのかについて、さらに踏み込んだ議論が望まれる。

こうした課題は、申請者も述べているように、今後、申請者自身がどのような教育実践を展開していくかによって解決されるであろう。「自分の日本語教育学」とは何か、それは具体的にどのように設計・実施されるのかという問題こそが、実際の実践上の課題であるからだ。日本語教師一人ひとりが「自分の日本語教育学」とどのように関わられるのかという課題が申請者自らの教育実践として提示されることを期待する。

以上、さらに考察されるべき今後の課題は残されているとしても、本論文は、優れた学術研究として高く評価することができる。よって、本論文をもって日本語教育学の博士学位論文に値するものと判断できる。